

自由論題 7「東南アジアの経済」・報告 2

報告テーマ

東南アジアの景気循環  
“Business Cycle in Southeast Asia”

氏名(所属)

吉野文雄(拓殖大学)

要旨(800字程度)

東南アジアの景気循環では、景気の山よりも谷のほうが明確に観察される。古くは世界大恐慌の1930年代の谷、1940年代のアジア太平洋戦争による谷が観察されるが、今回の報告では、1970年代半の谷から1985年代半の谷までを第1循環、その後の1997年のアジア経済危機に至る期間を第2循環、その後の2009年の世界金融危機に至る期間を第3循環、それ以降現在に至る期間を第4循環として、その山と谷の特質を分析する。

東南アジアにおいては、景気の山も谷も外生的な要因によって引き起こされてきた。「外生的」には2つの意味がある。第1の意味は東南アジアの経済活動の外部という通常の経済学的な意味であり、第2の意味は東南アジア域外という意味である。

1970年代半の景気の谷は第4次中東戦争を機に生じた第1次石油危機によって生じた。東南アジアでは、産油国と非産油国とで当初は明暗を分けたが、世界経済の低迷の中で総じて景気は後退した。

1980年代半の景気の谷は1979年の第2次石油危機によって一次産品価格が上昇した後、反動で下落に転じたことによって生じた。世界的な高金利が債務国である東南アジアを苦しめる結果となった。

第3循環はプラザ合意後の円高による日本企業の東南アジア進出に象徴される景気の山とその後のバブル景気とその崩壊としてのアジア経済危機で一巡した。アジア経済危機は日米などの域外先進国における期待の変化が引き金を引いた。

第4循環の起点としての世界金融危機は米国発の危機であり、やはり域外で発生した。この循環がどのように終わるかが本報告の結論部分となる。

1つの可能性としては、景気の谷が内省的な要因によってもたらされることが考えられる。そうならば、東南アジア経済は新しい局面に入ったといえよう。たとえば金利高によって投資プロジェクトが中断されたりするようなケースが想定される。しかし、これまで外生的に景気の谷がもたらされたという歴史的経緯を考えれば、中国の景気後退が東南アジアに波及して景気の谷を構成する可能性が高い。この2つの可能性をいくつかの経済指標を用いて検証する。